

シュトルム文学のメッセージ

— 『ハーデルスレフフースの祭り』をめぐって

田 中 宏 幸

1

十九世紀北ドイツの詩的リアリズムの作家シュトルムは、抒情的短編『みずうみ』の作者として有名であるが、この甘美で儚い愛の物語はその出世作でもあった。やがてシュトルムはこの初期の抒情的作風から、次第に写実的な傾向を強めながら、近代化して行く当時の人間社会のさまざまなコンフリクトをテーマに、数々の優れた短編を発表、短編小説のジャンルの完成と洗練に貢献するのであるが、生涯にわたり、その作品には無常の感情を基調とする抒情的な気分が漂い、「愛」と「死」のテーマが響き止むことはなかった。『城にて』、『水に沈む』などのより高い緊張度と深刻な問題性をはらむ愛の物語の名作が生み出されたのも当然であった。しかしくぶん気軽な気分の『遅咲きの薔薇』のような夫婦愛の物語も彼の領域であった。この短編は中世ドイツの詩人ゴットフリートの有名な宮廷叙事詩『トリスタンとイゾルデ』の愛の物語が実務に追われていた近代化時代の実業家ルードルフの妻への愛を燃え立たせる「愛の妙薬」となるという設定で注目される。作品の中での効果は特別冴えているというわけではないが、ロマン派以来関心をひいてきた中世の愛の物語の引用により、間接的でしかも控え目ではあるが官能的な愛を描き、そこに十九世紀の近代化しつつある社会で失われて行く人間の自然的な感情の魅力を感じとり、それを暗示的に伝えようとした点は評価されなくてはならない。

ところでシュトルムが中世騎士文化の「ミンネ」、つまり「愛」とそれを称えるミンネザング芸術に関心をもっていたことは、親交のあった文芸史家エーリヒ・シュミットもその「覚書き」の中に書き記しているが、⁽¹⁾彼が「トリスタンとイゾルデ」の「愛と死」のモチーフをどのように捉えていたのかについては詳細は伝えられていない。しかし興味深いことにシュトルムは晩年の1885年、愛と死の物語『ハーデルスレフフースの祭り』において再びこのモチーフを取り上げ、しかももっと大胆に展開して見せたのである。時にシュトルム67才であった。この老詩人シュトルムはこの最後の「愛と死の物語」で何を伝えたかったのであろうか。

この小説の創作への意欲をかきたてたのは、しかし直接的には「トリスタン」の素材ではなくて、1843年マンハイムで刊行されたバーダー編纂のネッカル地方の伝説集に収められていた21節からなるヴェンツェル作のバラード『婚礼』であったという。⁽²⁾特にこのなかの「若い騎士が、伯爵令嬢を裏切り死に至らしめる。やがて騎士はその父の老伯爵から娘の婚礼に招待されるが、実はそれは娘の葬儀であった。騎士は城に赴き追いつめられて塔から身を投ずる」というモチーフにひかれたのである。かよわき伯爵令嬢の心痛とその父の悲嘆、不実な騎士とこれに対する老伯爵のいくらか不気味な復讐はシュトルムの関心を引いたであろう。シュトルムはこの1100年頃の南ドイツの史実に基づく物語詩に触発され、これに「トリスタンとイゾルデ」のモチーフを絡め、さらに作品舞台を14世紀北シュレーズヴィヒに設定、ハーデルスレフフー

ス城の騎士ラーヴェンストルップの末娘ダグマルとドルニング城に住む騎士ロルフ・レムベックの愛と死の物語を書き上げたのである。この主要なモチーフ以外にも、前夫をひそかに毒殺し今は何くわぬ顔でロルフの妃となっているヴルフヒルトのような「宿命の女」^{フム・ファタル}的妖女タイプが登場、また1349年のベストの流行についての不気味な死の描写などがこの作品のメッセージにインパクトを与えている。こうした二次的モチーフ・素材のためにもシュトルムは数多くの歴史資料、民俗資料などを調査研究したと伝えられている。⁽³⁾

2

まずこれらの素材・モチーフがどのように展開されるのかを概観しよう。⁽⁴⁾

トリスタンに擬されるロルフ・レムベックなる騎士は史実にも登場する騎士クラウス・レムベックの知られざる息子とされ、彼については「暗い時代の混乱の中へ月の光のようにさしこみ突然引き裂かれた愛のアヴァンチュール」が伝えられているだけであるという。この「愛のアヴァンチュール」が他ならぬこの物語の中核である。彼は宮廷の教養を身につけた「楽しい、朗らかな青春と熱い生の喜び」に満ちた騎士として描かれている。故郷でいわゆる四学科を修めた後パリに赴き大学で熱心に学ぶと同時にフェンシング、ダンス、リュート演奏、シャンソンなどの芸術、いわゆるボーナス・アルテスを修め、さらに当時ドイツ王カルルの宮廷があったブラークの新大学で文学を学ぶ。中世宮廷文学の傑作、例えばハルトマンの『イーヴァイン』と『哀れなハインリヒ』、ヴァルターのミンネザング、ヴォルフラムの『パルツィファル』などであったが、とりわけ彼の心をとらえたのはシュトラースブルクの巨匠ゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』であった。このモチーフはこのような形でまず登場する。パリで修めたダンスの技はここでは国王の目にとまるくらい見事なものとして描かれ、また多くの貴婦人たちを官能的に魅了している。もちろんロルフのダンスはエロスのモチーフと共に「生の享樂」を象徴するものであり、この場面は因習にとらわれない「美しき生」に憧れる主人公の姿を伝えている。やがて故郷に呼び戻された彼は、ホルシュタインの騎士の未亡人ヴルフヒルトと結婚する。実はヴルフヒルトは魅力的な女ではあるが、傷付き病床にあった前夫が回復に向かうと、以前の日常的な「つまらない生活」に戻ることを恐れてこれを毒殺してしまった妖女、いわゆるファム・ファタルの典型で、支配欲の強い残忍な女、過剰な陶酔的なエロスを求める情熱的・官能的・誘惑的な女である。婚約がととのいクラウスとロルフが立ち去ろうとすると、彼女は「さあキスしてくださいな。婚約のキスを、ロルフ・レムベック殿」と迫り、さらに激しい情熱のほとばしるような口調で「ロルフ・レムベック殿、あなたはドイツにいらっしやいましたね」、「あちらでは婦人奉仕が盛んだそうですが私は夫を独り占めにしたいのです。他の女の唇に触れたりなさったら許しませんよ」と言っているのけるのである。さすがにロルフは愕然とはするが、その激しい美しさに魅せられてしまう。妖女の典型である。やがて結婚式も終り二人はドルニング城にやってくるがヴルフヒルトの積極的態度はますます目立つばかり、ロルフは「ヴルフヒルト、きみは危ない人だね。きみはぼくばかりかぼくの家臣や何かにも支配しようというのだから」と漏らすことになる。ロルフはこの妖女を恐れ始めている。だが彼女は部屋で二人だけになると、またもや情熱的に夫を抱きかかえ「ロルフあんたが欲しいの、あんたが。他のものはどうでもいいの」と言うのである。しかしこの妖女は結局はロルフをつなぎとめることはできない。

ハーデルスレフフースの城はドルニング城の東1マイルばかりのところにあった。騎士ハン

ス・ラーヴェンストルップが城代をつとめていた。一家の幸福は1349年9月のある午後「黒い霧」とともに襲ってきた「黒死病」によって無残に消え去る。美しい子供たちは次々と青黒い遺骸に変わり果てたのである。猛威を振るった病魔もおさまったかに思われたところに遂に夫人も犠牲になる。彼女は「愛しい方さようなら、ああかわいいダグマル」と言い残して立ち去って行くが、彼女を待っていたのは孤独な死であった。しかし末娘のダグマルと騎士はこの「大なる死」を免れたのであった。母を失ったダグマルのためにはやがて親戚の老婦人が迎えられ、彼女は手芸や読み書きなど習うのであった。騎士は無口の暗い無慈悲な男になっていたが、あるときダグマルこそ残された「地上の唯一の幸福」であることに気が付き慰められる。ダグマルは孤独ではなかったが、物静かな老婦人との静かな日々は余り朗らかな生活ではなかった。そんなある日この老婦人はハルトマンの『哀れなハインリヒ』の物語を読んで聞かせる。その言葉は「水晶の滴のように」彼女の耳に滴り落ちる。領主ハインリヒの病は「喜んで身を捧げる処女の心臓」によって癒されるという医者言葉を聞いて、宿の娘が「私は処女です。領主様のご回復のためにメスをお取りください」と名乗りでる件に感動する。その目には高貴な輝きがきらめいていたので婦人は彼女を思わず抱き締めて「あなたもきっとこんなことがおできになりますよ、本当にそう思いますよ」と言う。しかし「あれは愛だったのでしょ」というダグマルの問いには「ああ、神様があなたを愛からお守りくださいますように」と逃げ腰になる。またゴットフリートの『トリスタン』も読むが、これも老婦人は心配して取り上げてしまう。性的なものから用心深く遠ざけようとする倫理教育の影が感じられる。こうしてダグマルは16才になったが、普通の少女に比べて華奢で「彼女の体はまるで清らかな魂^{アミア・カンディーグ}によって作り出されたようであった。」このハーデルスレフフースのイゾルデは明らかにヴルフヒルトの対極にある「^{アム・フワッセル}かよわき女」のタイプである。ダグマルがある日、白いアネモネをアレンジする姿を見て父が漏らす「長くはそばにはいない妖精」という言葉は暗示的であるが近い未来の予感ともなっている。

6月の黄昏時ヴルフヒルトを先に帰したロルフは一人森を彷徨い歩くうちに、ふと美しい歌声に誘われてハーデルスレフフースのダグマルと巡り合うことになる。上の方の城壁の間からは一人の女、否女ではなく子供がもたれかかっていた。女なのか子供なのか彼にも分からなかった。ロルフは「おお、美しき人よ、幸多き人よ。神よ快き人に快き生を与え給え」と叫ぶが、これが巨匠ゴットフリートの言葉であることに気付いたダグマルは、勇気を奮い起こし「神があなたを祝福されますように。高貴な方よお礼申し上げます」とフランス語を混ぜながら応答する。やがてロルフは魔法にでもかけられたように陶醉しながら立ち去る。一方妖女の妻ヴルフヒルトは「あんたの薔薇をこげにするんじゃないよ」と待ち焦がれていたのであったが、ロルフは彼女のもとには行かなかった。

次の夕べダグマルは老婦人から若い騎士レムベックの噂を聞くが、あの昨夜の高貴な方とはまだ気付かない。ロルフは再びハーデルスレフフースへ赴きポプラの木を上って城壁を越えて城の庭園に忍び込む。ロルフに尋ねられてダグマルは名と身分を告げる。しかしロルフは身分も名も明かさない。もしそうすれば二度とお目にかかれないうので彼女は不安な気持ちにかられる。ダグマルは「いつまでも隠していらっしやらないで」と言いながら身体的苦痛を感じたように左胸に手をあてた。彼女はベストの墓指を指差しながら大なる死の犠牲となった母と兄弟のことを思い起こす。夜風が立ち彼女の黒い髪をほっそりとした顔から舞い上げ、その華奢な体を包む衣服をあおった。突然ロルフには彼女もこの世には長くはとどまりえないかの

ような気がするのである。ロルフは慰めの言葉をかけるが、ダグマルは「私たちは決して死の痛手から癒されることはありません」と叫ぶ。それというのも彼女はペストの死を免れたものの、心臓の病弱という分け前は免れなかったのである。そのためいつ死ぬかもしれないような、そして大きな喜びと苦しみには耐えられない身であった。ダグマルのふと口にする「愛のために死ぬこともあるのでしょうか」という言葉には一種の予感が込められている。こうしてダグマルは典型的なファム・フラジルとして描かれ、そこにはまた絶えず死の影が付きまとっているのである。この夕べはダグマルにとっては興奮のミンネの一時であった。この日以来しばらくは事は順調に運ぶが、その間もダグマルは燃えるような苦しみを誰に打ち明けることもできない日々を送っていた。ロルフは偶然、妻の前夫毒殺の噂を耳にし、血縁結婚の口実で妻との腐れ縁を断ち切ろうと考える。ある晩ロルフはダグマルのもとを訪ねる。妻の指図でガスパルトに後をつけられているのには気付かない。ダグマルは抱擁されキスを求めるが、不安が脳裏を過ぎたロルフは彼女の顔を抱き躊躇する。そして半ば喜びと半ば苦痛を感じながら「おおダグマル、ミンネは炎です。あなたを焼いてはいけません」と言う。これは彼女には良く理解できない。ロルフの「あなたはぼくの心を喜びで満たしてくれました。それなのにあなたの心に死の苦みを与えていいものでしょうか。美しい人、天上の人、聞いてください。…あなたはおとぎ話のなかの湖の月の光に照らされた睡蓮の間からおとずれた優しい妖精のように思われます。あなたのきれいな肩に翼が生えて、ぼくを若い生の混乱から運び出してくださる夢を見たんですよ」という言葉もまたロマン的美化に彩られているが、まさにファム・フラジル崇拜のバラダイムに属する。「おお愛しい方、あなたがいらっしやらなければ生も死もありません」、「ダグマル、まず生きるのです。二人で一緒に、おいやですか」、これに対して彼女はただうなずいただけであったが、奇跡でも聞くように彼女の息は一瞬止まった。

こうしてヴルフヒルトが探し求めていたロルフの「お人形」は誰なのか明らかになった。ロルフの不在の間に彼女はハーデルスレフフースの城代に子細を伝えポプラの木を伐採させる。ダグマルはこれを見てロルフにはもう会うことはできないと嘆き父の腕のなかに倒れてしまう。老騎士はやがてロルフは他ならぬロルフ・レムベックと知り愕然とする。ダグマルの心臓には「二倍に」鋭い矢が突き刺さった。父の宗教的・倫理的な説得にも彼女は耳を貸さない。この世のただ一つの願いはロルフ・レムベックであった。「ミンネは死よりも強いのです」、「神様お助けください。私からあの方を取り上げないでください。さもないとあなたの天国に住むことができません」、「お父さん、あの方を私のお葬式にお呼びください。あの方に見ていただきたいのです。もう一度。だけどその後は……あの方を無事に帰らせてあげてください」と言い残しその魂は飛び去っていった。騎士ラーヴェンストルップの絶望と悲嘆は突然激しい憤りに変わった。娘の死は秘されることになり、ロルフはダグマルの婚礼にといって招待される。ガスパルトは行かないように進言するが、ロルフは訝かりながらも、そして結末を予感しながら黒装束でこの招待に応じる。シュトルムはこのモチーフには特に創作意欲をかきたてられたのではないかと思われる。不気味さをただよわせる緊張感に満ちた描写は現代の読者をも十分魅了する迫力がある。出迎える城代の黒装束、沢山の蠟燭は灯されているがしいんと静まりかえる広間、黒装束の男女。黒は娘が三日前にお揃いの定めの色として選んだものという城代の説明。そのとき締められた扉の向こうからゆるやかに進んでくる行列のざわめくような足音。扉が開けられると若い女たちの「深き淵より」の歌声がまるで星から舞い降りてくるように響いてきた。ぞっとするような戦慄がロルフ・レムベックを襲った。乙女たちは歌いながら一つ

の柩を祭壇に安置した。そこには白い死装束の女——否、女ではなく白い髪飾りからのぞいていたのは少女の死顔であった。恐ろしい叫び声がひびいた。歌声はとぎれた。ロルフは走り寄り柩に身を投げかけ、愛する人の死顔に唇をおしあて「おお、ダグマル。これがぼくたちの婚礼だ」と叫ぶのである。突然ざわめきが起り、司祭の「破門」という叫び。しかし一人の若い歌い手は「おお愛の神よ、二人をあわれみ給え」と祈る。ロルフは突然死んだ恋人を柩から抱き上げ走り出した。亡骸を胸に、優しい死顔を狂ったように見つめながら逃げて行った。どこか彼女と二人だけになれる安全な場所を求めて。最後の静かな一時を過ごすために。こうして遂に城の塔の上にとどり着く。ここは静かで下の庭の方からは菩提樹の梢のそよぎが聞え、空には無数の星がきらめいていた。入江の水の上には月が光の橋をかけていた。優しい聖なるダグマルの黒い絹の髪を死の髪飾りから解き放つ。わたしの子供を返してくれという父の叫びもロルフの耳には届かない。「おおダグマル、翼を広げてぼくを一緒に連れて行ってください」と叫ぶや彼女の体を両腕に抱いた。老騎士は彼を掴まえようとしたが、空を掴んだ。一つの影が飛び過ぎて行ったようであった。彼は城壁の彼方の星空のなかに娘の白い死装束がひるがえるのを見た。そしてただ下のほうから重いものの落ちる鈍い音が響いてきた。突然彼の怒りは煙のように消え去り、今はただ「神様、二人をお恵みで天国へお迎えくださいますように」と祈るのみであった。こうして二輪の美しい人間の花は散り、この物語も終わる。古い歌に「愛はいつもただ苦しみで終わる」と歌われている通りであった。『ニーベルンゲンの歌』からの引用である。

3

ところでこの作品に対する評価はこれまで余り芳しいものではなかった。現代のシュトルム研究の第一人者と目されるカルル・ラーゲもおその評伝において「ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（『トリスタンとイゾルデ』）からのいくらかの借用や、エーリヒ・シュミットの熱心な援助にもかかわらず、この小説は文体の点でも言葉の点でも成功していない」と消極的な判断を示している。⁽⁵⁾もっとも発表当時シュミットは全体としては『水に沈む』以来の成功作として賞賛している。ただ初稿の年代記的枠や『もう一人のレムベック』となっていたタイトル、その他語句の修正を勧めたが、シュトルムはこの提言に従いこれを改めた。しかし同時に表明されたブランクでの修業の設定、及びロルフとダグマルの最初の出会の際に交わされる『トリスタン』からの引用についての不満に対してはシュトルムは強く反論し全く修正に応じなかった。⁽⁶⁾

かねてより親しく文学的意見・論評を交換していたパウル・ハイゼはストーリーについては異議を唱えなかったが、全般的な修飾過多な美文調を批判し、特に最後の場面、すなわちロルフがダグマルの遺骸を抱きかかえ城内を狂奔、塔から死の跳躍を遂げる終結部分には不快感さえ表明し、また二人の最初の出会いを「オペラっぽい」と批判した。シュトルムは最後のシーンに関してはいくらか狂奔の動機付けなど改めはしたが基本的には変更しなかった。美文調の批判とも関連する後者に関して、最初の出会いとしてはこうあるべきだとして全く改めることはなかった。これに対し良く知られているように、ハイゼが指摘したヤンプス調の部分は、この散文の老大家は自らの不注意にいくらか恥じ入りながらこれを改めたのであった。

親戚の牧師エルンスト・エスマルトは道徳的観点から、ダグマルにはロルフが結婚していることを知った後も罪の意識が見られないことを指摘したが、シュトルムは「愛は無邪気な状態

から生命の危機に瀕する状況になったからといって退けられるものではありません」と応じているのは注目される。ただダグマルは死の矢を受けてからそれを知ったこと、彼女は死んでから彼に見えることしか望んでいないことを忘れないようにと付け加えている。これによりシュトルムが道徳的な絆は愛を束縛するものではないことを十分認識していたことが分かる。しかし同時にそのような愛の成達は現実の日常世界ではかなわないが、死の世界であれば許容される、あるいはそこでのみそれは可能だとも考えていたと思われる。これは十九世紀市民的倫理観から見て興味深い。これは硬直した市民道徳の擁護者の牧師には考えられないことであろう。

シュミット、ハイゼなどの当時の人びとのこの作品への批判の要点は以上のようなものであるが、いずれも十九世紀後半のいわゆる市民的観点ないしは詩的リアリズムの観点を示すものであろう。先述のラーゲの見解もいわばこれらを背景にしていると考えられる。しかし最近この作品は再評価されることになった。ラーゲ自身1988年に刊行されたフランクフルト版全集の注解部分で、作品の成立・評価についての主な経過を紹介した後、シュトルムが生涯にわたり関わってきた「高い」ミンネと「低い」ミンネ、道徳性と官能性、精神的愛と性愛の分裂の主題を展開した優れた作品であるとコメントするに至った。⁽⁷⁾このような主題はシュトルム自身の体験に基づき、すでに『みずうみ』、『遅咲きの薔薇』で描かれたが、前者のラインハルトはこの問題を諦念によって解決し、後者のルードルフは精神的愛と性愛を市民的な結婚生活のなかで克服した。しかし最後の愛の物語『ハーデルスレフフースの祭り』においては、このテーマは極端な展開を示すことになった。すなわちヴルフヒルトに見られる積極的なセクシャリティは空しく残忍で最後は恐ろしい孤独に至ること、これに反し精神的愛は最高の幸福に導くものとして、死を超越して耐えうるもの、しかしこの世では束の間しか実現できない繊細で優しいものとして提示されているとラーゲは説く。このような積極的評価はその評伝の新版にもそのまま反映されている。⁽⁸⁾

ラーゲはまたヴルフヒルトとダグマルの対照的な婦人タイプに注目し、そこに見られる妖女嫌悪と少女礼讃は中世的ではなく近代的であると指摘し、シュトルムの友人ペーターゼンの批判に応じた言葉「永遠の純粋な人間的コンフリクト」の正当性をここに読み取ろうとしている。これは確かに正しい。シュトルムは中世に舞台を借りはしたが、伝えたかったのはまさに永遠の問題、すなわち人生の生き方であったに違いないから。

ところでこのラーゲの新見解が示された翌年1989年ヘルマン・コルテはこの作品に十九世紀末のデカダンスないし「フアン・ド・シユフル世紀末」的徴候を読み取り「シュトルムはいわば実験を行うように詩的リアリズムの<反リアリティ>の傾向を極端に押し進め、この短編において家族主義とその偏狭な規範基準に対し、美的な対極を示した、すなわち生を妨げる硬直した倫理の対極を示した」と結論づけた。⁽⁹⁾すでにトーマス・マンのシュトルム論には市民的規範と感傷性、俗物的メンタリティに帰着するようなシュトルム像に対する異議が提示されているが、⁽¹⁰⁾それをコルテはこの作品において典型的に確認できると主張している。

コルテによればこれまでの批判は要約すれば、シュトルムの全体的なリアリズム的世界からの離反と過剰な装飾的・美的文体、美的世界への逃避に向けられているが、それはまず登場人物像に見られる。騎士ロルフは巧みな踊り手として描かれているが、それは美的で歡樂的な生のベンスキエンストラ芸術家の象徴でもある。そしてこれと結ばれる官能的・誘惑的なエロスのモチーフにはすでに死が付きまとっている。ロルフは愛のために「死」を称え自らの「生」を高揚する、まさにデカダンス的な人物であるとされている。その妻ヴルフヒルトは「妖女」の典型であるが、

そこに示される強力な「生への意志」はまた世紀末の指導的概念「生のパトス」に通ずるものであり、これによりこの作品が世紀末的傾向に結びつく¹⁾と見ている。一方ダグマルはその対極の「かよわき女」を代表するが同様に満たされた美しい生へのパトスが見られる。さらにダグマルの宗教的・神秘的感情が指摘されるが、これも世紀末の特徴に属するであろう。彼女は典型的なファム・フラジルとして描かれているが、これはファム・ファタルとともに世紀末文学の代表的な女性のタイプであった。もちろんこの二分はニーケ・ヴァーグナーの指摘するように<女というなぞ>を解くための「世紀末文学の典型的類型論」の成果であって、現実にはもっと多様であったに違いないが、ともかく興味深い単純化である。性の不安と拒否と性の過剰と陶酔が対立しているが、ともに「エロティックな願望の変容したもの」ではあろう。世紀末文学の作家たちは、しかしこのいずれかのタイプを崇拝することによって二つのグループに分類されるという点は、一応注目しておこう。⁴⁾この観点ではシュトルムはもちろん体験的にも(ベルタとドロテア)、そして少なくとも『ハーデルスレフフースの祭り』ではファム・フラジル派である。

「死」のモチーフはペストとその大なる死の描写にも見られ、これももちろんデカダンスの徴候を示しているが、死の礼讃・生との同一視は「トリスタン」の主題との関連で最も重要である。その「愛と死のモチーフ」^{エロス・タナトス}はまさにデカダンスの本領であろう。ロルフの^{ゾルトモルグレン}死の跳躍はいわば愛の死である。トリスタン物語で愛の死を遂げるのはイゾルデという違いはあるが、愛し合う恋人が死によってのみ結ばれる、あるいは死によって成就される愛、より美的な生のための死という観点では同じメンタリティに基づいている。

以上のコルテの指摘したデカダンス的・世紀末的特色を要約すれば、確かにこの作品は「生を妨げる頑直した倫理の対極」を示しているということになる。ではシュトルムはそれによって何を伝えたかったのか。少なくとも反道徳的な愛と生は現世では破滅するしかない、死の世界でしか成就できないという警告のメッセージではあるまい。ではラーゲのよう読み取るべきであろうか。それは可能であろう。しかしその世紀末の特徴を見れば、むしろ「美しき生」を少なくとも称えたかったのではないかと思わざるをえない。『みずうみ』で諦念を描き、『遅咲きのばら』でその市民的克服のメッセージを告げた後には、やはりこの老詩人は「美しい満たされた生を生きること」を歌い上げたかったのではないか、そして少なくともそれを妨げる社会的束縛の無くなることを願ったのではないかと思わざるをえない。『ハーデルスレフフースの祭り』は、そのための聖なる祭りでもあった。シュトルムがかつて20年も前に歌った「ただ生の美しさのために…生きよ」という言葉が思い起こされる。¹²⁾

注

- (1) Vgl. Schmidt: Erinnerungen. In: Theodor Storm – Erich Schmidt. Briefwechsel. Hrsg. von K. E. Laage. Berlin 1972. Bd.1., S.16
- (2) Vgl. Theodor Storm. Sämtliche Werke in vier Bänden. Hrsg. von K. E. Laage und Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987f. Bd.3, S.934ff. (フランクフルト版全集)
- (3) シュトルムが参照した文献についてはフランクフルト版全集のBd.3, S.940-946に紹介されている。
- (4) フランクフルト版全集 Bd.3, S.389-458 及び Theodor Storm. Sämtliche Werke. Hrsg. von Peter Goldammer. 7.Auflage. Berlin und Weimar 1992. Bd.4, S.7-77による。
- (5) Vgl. K. E. Laage: Theodor Storm. Leben und Werk. 5.Auflage. Husum 1989. S.80

- (6) 以下の受容・論評の経過はフランクフルト版全集 Bd.3, S.946-952 また注4のゴルトアンマー編全集 Bd.4, S.641ff.に詳細に報告されている。他に注1のシュトルムとシュミット往復書簡集及び Theodor Storm-Paul Heyse. Briefwechsel. Hrsg. von Bernd. Bd.3, Berlin 1974 を参照した。
- (7) フランクフルト版全集 Bd.3, S.951f.
- (8) 注5の文献の改定第6版(1993), S.83
- (9) Hermann Korte: Ordnung und Tabu. Studien zum poetischen Realismus. Bonn 1989. S.127-147
- (10) Thomas Mann: Theodor Storm. In: Theodor Storm Werke. Hrsg. von Honnefelder. Frankfurt am Main 1975, Bd.2, S.515ff.
- (11) Nike Wagner: Geist und Geschlecht. 2.Aufl. Frankfurt am Main 1982, S.138ff.
世紀末女性像については 田中まり：世紀末ウィーン文学における女性像をめぐって [北陸学院短期大学紀要23号(1991)所収] でも論じられている。
- (12) フランクフルト版全集 Bd.1, S.265

Hiroyuki Tanaka: Message der Dichtung Theodor Storms
—Zur Novelle "Ein Fest auf Haderslevhuus"
Kontaktadresse: Suzumidai 5-12-23, 920-11 Kanazawa, JAPAN